

ゆるふーVI

まなキキ・オンライン講読会

『主体の解釈学(2)』第1講

一九八二年二月十日①「自己への配慮と立ち返り」他

2025年10月7日

M せんせい

(1)の簡単な振り返り…

- ・ 「自己への配慮」の話をしている…(ソクラテスの時代、ソクラテスの愛人・アルキビアデスに諭していたところから始まる)
 - 「自己への配慮」の目的や実践のされ方が変化してきたこと
 - その変化の中で「主体」や「真理」の在り方も変わってきているということ
 - 「自己への配慮」が、自己を統治すること、他者を統治することとつながっていくということ。

つまり、「自己への配慮」を通じてフーコーは、「自分がどう社会と接続するか」にまで及ぶ主体論を提起していたのではないか、という可能性について議論してきたように思います…。

■ 「自己への配慮」が「自己の陶冶」に展開していくまで

① 自己の実践が教育の飛び地でなくなった

- ・ 成人の政治的生活に入ろうとする若者に課された戒律(教育の補完物)ではなく、生存の全展開を通じて有効な勧告となった
- ・ 自己の実践は生の技法そのものと同一化した

② 二人だけの関係のものではなくなる

- ・ 師と弟子、弁証法的に恋愛関係のなか書き込まれるような問題ではなく、さまざまな社会的関係の一大ネットワークの統合され、これと錯綜し絡み合うものに
 - 他者たちや都市に然るべく配慮することができるよう自己に注意を払うことが目指されてきたが、
自己自身のために自己へ配慮しなくてはならないようになった。
:他者たちへの関係は自己の自己への関係のなかに含意され、そこから演繹されるから

■ 自己自身への方向転換という大きなイメージ p242, L15-

- ・ 独楽のイメージ(外的な運動に要請され、その推進力のもとで回る・さまざまな方向、要素に向かってさまざまな様相を呈する・一見動いていないように見えるが動いている)
 - ・ 知恵とは、外的な運動の要請ないしは推進力による非自発的な運動によって誘発されない
 - 自分の中心にこそ、ひとが自らを固定する点、そこから動かないような点を求める必要がある
 - 自己自身の中心に立ち戻って、そこで不動化する、決定的に不動化する運動でなくてはならない
- ⇒ 「立ち返り(コンヴェルション)」: 私たちにとって外的なものから自己を逸らし、自己へ復帰させるというイメージ。自己自身へと方向転換すること。
- 構築された概念というよりも、実践的図式のほうが生み出されてきた。

- 西欧が経験した自己の技術において最重要の考え方のひとつ(キリスト教だけではなく、哲学的実践においても決定的な役割を持ってきた)
- 19 世紀以降、劇的に思考や実践、経験、政治的な生活のなかに入ってくる;革命的主体性
:立ち返りという自己の技術の要素が政治領域に接続したのは、イギリス革命やフランス革命の時期では(おそらく)なく、19 世紀以降。

■ 古代(紀元 1-2 世紀)の立ち返り p245, L17-

- ・ 立ち返りという主題は新しいものではない。
- ・ プラトンにおいて、「エピストロフエー」の概念という形で出てくる。



- 現世と来世の根本的な対立によって支配されている
- 魂を、牢獄・墓としての身体から解放し、引き離すという主題によって支配されている
- 知ることの特権性によって支配されている
 - ・ 自らを知ること:真実を知ることが自らを解放する

⇒ ヘレニズム・ローマの文化における「立ち返り」の主題 p246, L12-

- ・ 現世と来世の間の対立を軸にせず、世界への内在そのものにおいてなされることになる回帰
- ・ 私たちの権内にないものから私たちの権内にあるものへと移動させる(私たち主人たりえないものからの解放、私たちが主人となるようなものに到達するための解放)
 - 自己の自己に対する完全な、完成された、適切な関係の定位という様相を呈するようになる
 - 身体からの切り離しではなく、むしろ自己の自己への適合においてこそ立ち返りはなされる
- ・ プラトンでは、想起という形で認識することが立ち返りの本質的かつ根本的な要素を構成していたが、立ち返りにおいて本質的な要素をなすのは、認識というよりも訓練、実践、鍛錬、アスケーシスとなる

■ キリスト教文化のなかでみられる立ち返り(メタノイア) p247, L14-

- ・ 悔悛であると同時に変化、思考と精神(=霊)の根本的な変化
- ① 主体の存在様式を一撃のもとにひっくり返し、変容させてしまうようなものでもある(準備があるかないか、そこまでの行程があるかないか、努力があるかないか、修練があるかないかとかかわらず)
 - ② ひとつの存在型から別の存在型(死から生、可死性から不死性、暗闇から光、悪魔の支配から神の支配)への移行
 - ③ 立ち返りが生じ得るのは、主体の内部で断裂が生ずる限りにおいてのみ。立ち返る自己は自分自身を放棄した自己である。

⇒ ヘレニズム・ローマの時代における哲学や道徳、自己の陶冶における立ち返り p248, L15-

- ・ 断裂は、自己の内部で生ずる区切りではない(自己と自己との断裂ではない)。自己を取り巻くものとの間の断裂、自己が隷属や依存、制約を免れるために、自己の周囲においてなさねばならない断裂。(主体を解放するための断裂)
- ・ 自己に向かって目を向けることが必要である(自己を眼前に据えることが必要)
- ・ 自己へと向かうということ、それは同時に、港に戻り、あるいはまた軍隊が自分を守ってくれる都市や要塞へ帰還するように自己へ回帰するということ。
 - 自己は修練と哲学的実践の長い行程を通して戻っていく地点なのか、自己とはひとつがつねに眼前に据え、ただ知恵だけがついには与えてくれる運動を通して到達できるような対象なのか・・・？根本的なあいまいさ、揺動がある

キリスト教あるいはキリスト教以後のメタノイア	自己の内部における断絶ないし変異	横断的主体化
ヘレニズム・ローマの時代における「立ち返り」	自己から目を離さず、これをしっかりと対象として固定して、ついには到達ないし回帰する運動	自己主体化 :いかにして自己を目的として定めつつ、自己の自己に対する適切で十全な関係を打ち立てることができるのか、が問題

(かつて、メタノイアという語は一度も立ち返りという意味を持ったことはなかった。むしろ否定的な意味合い、否定的な価値付与がはっきりしたものであった)

- ・ 自己への立ち返り、自己への回帰という主題系で問題になっている事柄≠自己を放棄し自分自身から再生するといった、主体自身の全体的な変動による創設的な転換としてのメタノイア
- ・ 3-4 世紀になってはじめてメタノイアという語が、「主体の主体自身による更新」という肯定的な意味で現れる

■ 第三の道の擁護: プラトンのエピストロフエーとキリスト教のメタノイアのあいだ p253, L11-

エピストロフエー	?	メタノイア
魂が自分の源へと回帰するということを含意する立ち返りの概念、体験のこと。 魂は存在の完成へ回帰し、存在の永遠の運動のなかにあらためて場所を占める	フーコーはここに注目 第三の図式	精神の大変動、根本的な再生。主体自身による主体の再・出産であり、その中心には自己および自己の自己による放棄の経験としての死の復活がある。

- ・ ピエール・アドは、エピストロフエーとメタノイアの対立そのものを、西欧思想、西欧の霊性の、西欧哲学の恒久的な二つの極とする(→それはそれで説得力があり、納得することはできる)
- ・ しかし、通時的な展開という観点からは、プラトンからキリスト教に至る時期に起きた出来事を理解するための説明・分析格子として用いるのは非常に難しい

⇒ ヘレニズムおよびローマの思想においては、第三の立ち返りの図式がある

: エピストロフエーでもメタノイアでもない立ち返りの検討

- 検討の方法(1): 視線の転換=立ち返りの問題の検討 p255, L4-)

どのようにして、「視線を自己自身の方に向け、自己自身を知る」という問題が立てられるようになったのか？

- ・ プラトン主義：自分を認識の対象として構成せよ(自分自身のうちを見つめ、自分のうちに真理の種子を見いだせ)、という呼びかけだったのか
- ・ キリスト教および修道院の、(お前の精神を訪れるものを送り出したのが、神なのか、魔物なのか、あるいはおまえ自身なのか、またお前の精神を訪れる、見かけはこの上なく純粋な想念に、情欲の痕跡がひとつもないかどうか判別するよう)注意せよという指示のかたちのものだったのか？
- プルタルコスやセネカ、エピクテトス、マルクス・アウレリウスなどのテキスト中の「自己自身に視線を向けよ」は、プラトンの「汝自身を知れ」とも修道土的な霊性の「汝自身を吟味せよ」ともはっきりと区別された特別な意味をもっている

視線を自己に向けるべしという指示があったとき、視線は何から逸らされなくてはならないのか？

- ・ 日常的な喧騒から、つまりわれわれに他人への興味を持たせる好奇心から視線を逸らせる
- ・ 他者たちにおいて何が起きているかを見るのではなく、むしろ自己に関心を持つ
(プルタルコスの都市や家の例、アウレリウスの例)
- ※ 好奇心…無遠慮を意味する：関わりのないことに首を突っ込む
 - 他者たちの欠点にかかずらうよりはむしろ自分自身の欠点と過ちに、おまえのうちにある欠点をこそ見つめよ…とあるが、必ずしも他人に自己を置き換えることが大事としているわけではない
 - 他人の苦痛や不幸よりも、もっと快いもの(自然の秘密、歴史を読むこと、田舎における閑暇)の方へ魂を向けることをしなくてはならない
 - 好奇心に抗うためのさまざまな訓練の提案…
- 好奇心に対置しているのは、自分自身の内に何か良くない点を探りだすような精神の動き、注意ではない
 - 自己自身を分析や解釈、反省のひとつの対象として構成するということを導くものではない
- 目的に向かっていく際に守り、維持すべき真っ直ぐな歩みの中に自己自身を集中させる
 - 主体の集中の訓練であり、この訓練によって主体のすべての活動、すべての注意を、目標へと導くこの緊張に向けて引き戻さなくてはならない
 - 主体にとって重要なのは、自分自身の問題をしっかりと見つめるといこと
 - 運動選手的なタイプの集中(競争、格闘技、弓を引く人)
 - 認識の対象としての自己へ、ではなく、ひとが一つの行動の主体たるかぎりで自己自身にたいして持つ距離へと引き戻さなくてはならない

感想

「自己への配慮」が、【私という人間にとって必要なことを、自分の問題として引き受けていくことができるのか、そのことと真剣に向き合うこと】としてフーコーが説明したいと考えているのかなと思えるような回であった。「立ち返りにおいて本質的な要素をなすのは、認識というよりも訓練、実践、鍛錬、アスケーシス」とあったが、そのとおりで、頭ではわかっているつもりでも、それが本当に問われる局面で、「好奇心」や自己自身以外のものに目をとられてしまいがちで、自己に配慮し続けるためには、そういう試練？訓練、鍛錬を続けていくしかないのだ、と痛感した。何が自分にとっての核心、というか、コアのようなもの、意志？、本然？、本質？、役割？？のようなものといえるのかはわからないし、見出したとしても、それは独りよがりの

願望でしかないのかもしれない。ただ、「自己にとっての核心」は、第三者から評価されて判断できるものではなく、独りよがりになっていないかどうかを吟味するプロセスも含め、自分自身が大事なものと信じてことができると思えること、容易には覆されないものとして捉えられなければならないものだと思えた。「自己自身の分析や解釈」を目指すわけではない、という点で、「自分探し」のような種類のこととは異なるのだと思うが、そうならないような自己との向き合い方とはどういうものなのか。自分が思っているよりもずっと、「自己への配慮」は厳しく、揺らぎやすいもので、だから訓練や鍛錬が必要なのだと感じた。同じ時間や空間を共に生きる人たちとともに在るために何を大事にしたいのか——せめて、ここから考え始めたいと感じた。